



婦人
と子ども

第四卷第九號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざるごと。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にり會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年九月二日印刷
同 年九月五日發行

不許復製

編輯者 東京市神田區西小川町二丁目一番地
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
 印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
 發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
 發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

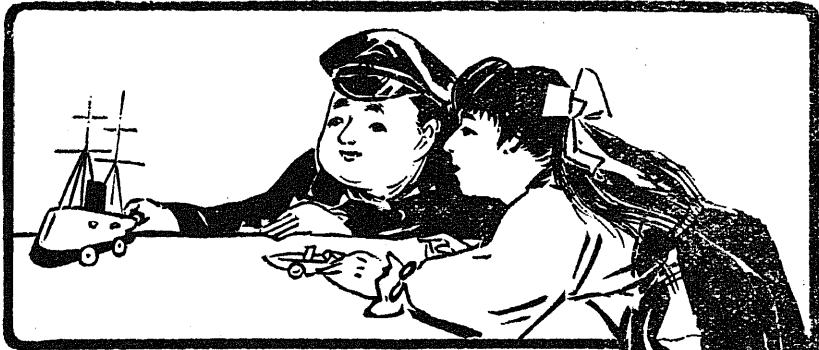
大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北陸館

婦人と子ども 第四卷第九號目次

子ども

眞の勇者	一
猿と左官	二
愛馬主を救ふ	三
教を守つて斃れた犬	四
お話三つ	四
怠惰者のおいのり	六
婦人と子ども	
慎教鏡といふ書物をよみて	牧 羊 二六
牛乳検査法	かはむら 三六
貞一の日記	その母 四一
松方伯海外貯金の話	望 四七
家庭に於ける所感	飯塚忠次郎 四七

亞米利加の女權	四九
雜感	平岩繁治 四九
馬鈴薯各種調理法	全 人 五三
フレーベル會俳句端書集	鹽野奇零 五三
歌七首	佐々木信綱 五五
修善寺に遊びし折	東 くめ子 五五
國風と布引の瀧	米 溪 五九
金の亞米利加	五九
松川浦に遊ぶ	小林雨峯 五九
大阪みやげ	東 牧羊 六三
宮城縣保母養成所	六六
摩天嶺の花	六七
ダルニーの物價	六七
軍人の幼児救護	六八
紫鉛筆使用の禁止	六八
會 報	六九



婦人と子ども

第四卷第九號

眞乃勇者

やまとの翁

今年ことの一月頃であつた、日本にと
露西亞ろしあとの仲なかが、だんく悪わるく
なつて、今いまにも戦争せんそうが始はじまり相あ
になつて來たのを見みて、氣きの早はや
い西洋せいようの新聞通信員しんぶんつうしんいんだの
陸海りくかい

軍の武官たちは、正月早々、大急ぎで以て、大勢、日本へやゝて
 來ました。

やゞぱり、其時分、亞米利加のバンクーバーを出帆して日本へ向
 けてやゞて來た汽船があつた。船の名は、グレイト、バードとい
 ふので、總噸數は、一万一千噸、此間、上村艦隊のために、擊沈
 せられた、浦鹽艦隊のリューリック號よりはまだ少し大きい、何しろ、
 只の商船としては、すばらしい大きな汽船で、又他の汽船から見
 ると、客室も非常に立派だし待遇もずゞつと親切だといふので、
 大抵の人は、皆此船の出帆をまちかまへておたと見えて、出帆の
 日になると、各室とも大方満員であつた。

で、此大勢の船客の種類はいろいろで、先づ國別にすると、第一

番に亞米利加人が一等多いのであるが、次には英吉利人、次には
 佛蘭西人、夫から獨逸人、澳大利人、夫から、西班牙人も居れば
 葡萄牙人も居るし、希臘人も伊太利人も、まづ、歐羅巴各國の人
 々は男も女も、皆乗り合はせて居るけれども、露西亞人丈は、一
 人も見えない、夫から、亞細亞人には、土耳其人が四五人と、支
 那人が七八人、尤も、下等室には、支那の労働者が、二三十人も乗
 っ居た。夫に、日本人が、十二三人、之も、下等室には、労働者と
 見えるのが、二百人許りも居た。位のものであったが、之を、職業
 から分けると、又いろいろである、商賣人もあれば、新聞記者も
 あり、官吏もあれば、學者もあり、學生もあれば、宣教師もあり、
 小説家も、畫家も音楽家も、まづいろいろさまざまの人が乗り込

んで居た。

こんな風だから、航海中、食事の後、甲板の上などへよると、いろくの話が、そこから、こゝからも湧いて来て、中々面白いのであるが、夫でも、時節柄、一番、話に花のさくのは、今にも始まらうといふ日露戦争談であつた。

ある日の晝すぎ、波は少し高いが、天気は殊更温かくって心持がよいので、皆々、いつもの通り、甲板に出て来て、こゝに五六人向うに七八人といふ風に、より集つては、何か話し合つたり笑つたりして居た。すると、ある一かたまりの中で、又おきまりの日露戦争談が始まつた、然し今日の戦争談は、いつもの様に、たゞ大勢で、がやく出鱈目に饒舌つてるのと違つて、餘程、眞面目

に熱心であつて、そして話して居るといふよりも寧ろ論じて居る様で、相手もたつた二人。然も其一人は、いかめしい獨逸の陸軍士官で、片々は瀟洒した英吉利の新聞記者なのである。

戦争の話といふと、いつも、どこからとなく大勢集つてくるのであるが、殊更、今日のは、出鱈目の話と違つて戦争専門の獨逸士官と、博學の譽ある英吉利の新聞記者との、眞面目な議論と來たから、さあ、集つたとはく上等中等の船客は、二人の周圍に、まっくろになつて人山をこしらへた、此中の日本人、之は何れも、獨逸や英吉利に留學して居った人たちだが、始めつから、其場に居つて、二人の議論を熱心に聞いた居た。

さて、先程から、大分長く、二人で議論して居たものと見えて、



高橋

今は、丁度、眞最中らしく、かの獨逸士官は、しきりに肩をいからし、恐ろしく目を光らかせながら、口から泡を飛ばして、新聞記者に食ってかゝって居る。

士じ あ、君、ブラオン君(新聞記者の名)君は、どうしても僕の議論に反対するね、どうしても、此戦争では、露國が敗北するといふのかね、君、オイ、ブランオン君」

ブラオン「左様、我輩の觀察によると、どうも、露西亞に勝てる理由がないからな、夫に、日本の方には戦勝の理由が澤山ある、君は軍人で居て、夫が分らんかね、ケルレル大尉(士官)どうです」

ケルレル「なんだ、失敬な、僕に分らん事があるものか、露國に戦勝の理由がない？、君は、新聞記者で居て、何を書いているのだ、ないと

いふなら、話して聞かせようか」

「ブラオン」ぢや 承はりましたよかな」

「ブルレル」先づ第一に、露國と日本との國の大きさを考へて見給へ、露國は何しろ世界陸地の七分の一の領地があるぜ」

「ブラオン」そりや露西亞が廣いのは今更言ふに及ばないじゃないか、歐

羅巴露西亞丈けども、日本の大方十二倍の廣さ(五萬積方里)があるし、

夫にシベリヤ丈けど、日本の三十倍(萬餘積方里)また、露西亞領中央

亞細亞が日本の八倍もあるのだから、皆合すといふと、丁度、日

本の廣さの五十倍にもなる、が、然し、國の大きいといふことは

必らず戦勝の理由にならないことは、今から、十年前に、日本が

自分よりか三十倍も大きい支那を敗つたのでも分るからね」

といふと、ケルレル大尉は、ひどくヤツキとなつて、ケルレルそりやそうさ、國が大きいからといつて、夫丈けでは必らずしも勝てるとは、僕も論じない、然し、日本と露國とは國に大小の違がある通り、夫れ丈け軍備に非常な相違がある、古から兵學者の言ふ通り、寡は次て衆に敵せずだから、此點に於て、日本はとて露國に叶はぬと思ふな、先づ、露國の陸軍を見給へ、すは戦争といふ日には、士官から下士卒合はせて百三十四萬人、其外に豫備士官以下が八十五萬人あるぜ、夫に、今度、戦争の舞台にならうといふ極東派遣軍が二十萬人、そこで、之に對する日本の陸軍はどうだ、平時は僅か十六萬、戦争の時といつても、漸、六十萬しか備へられんじやないか、之で以て陸軍の方の勝敗は言は

ずとも知れやう、まして、露國のユサク騎兵と來たら、勇猛無
 比、殆んど世界に敵なした、日本の騎兵などが、ユサクに向ふ
 もんなら、見給へ、夫こそ、丸で、赤兒の様なものだから、夫か
 ら、海軍じゃが、之はまあ、主に太平洋艦隊で比較て見よう、第
 一旅順口には、一万噸以上の戦闘艦が七隻、巡洋艦が七隻、夫に
 水雷母艦だの驅逐艦だの水雷艇だの約五十三隻はある、夫から浦
 港には、巡洋艦が四隻、其中一万噸以上のが三隻、其他に驅逐艦
 だの水雷艇が大分ある、所が日本の方は、どうだ、一万噸以上の
 戦闘艦は成程六隻はある、巡洋艦も、益に立たうといふのが、一
 千噸以上なので二十六隻、其他には海防艦だの砲艦だの報知艦だの
 廿一隻もあるが、實戦の間に合ふかどうかは怪しいて、併し水雷

艇なども合はせて、先づかりに、露國の太平洋艦隊と對等の力が
あるとしても、露國には、此他バルチック艦隊がある、戰鬥艦が
十八隻、巡洋艦が三十五隻といふ大艦隊だ、夫から黒海艦隊に裏
海艦隊などがある、だから、一步譲つて、太平洋艦隊が全滅され
たとしても、直ちに第二太平洋艦隊を派遣することか出来る、ま
して、太平洋艦隊が全滅する様では、日本艦隊も、とても、満足
には残らぬから、此新手に出遭つたら、夫こそ、全く滅亡するだ
らうよ、だから、戰爭すりや、吃度、露國が勝つ、日本も賢いか
ら、負けると思つたら戰爭はしないに違ない、だから、今にも戰
争が始まり相に騒いで居るが、そりや、ほんのおどかしで、結局
戰爭は日本の方から避けることになるのは分り切つた事だ、どう

だ、ブラオン君、之でも、君はまた反對するかね」

さすが、専門家だけあつて、敵味方の軍備を細かく比較して、沿々として息もつがずに論じたので、側に聞いて居た外國人など、中でも佛蘭人などは、一度に拍手喝采して、大尉の議論に賛成の意を表した。

今迄黙つて、たゞ、にこくと笑ひながら、時々、巻煙草の烟をフーッと上の方に吹き出して、聞いて居たブラオン君は、大尉の言葉の終ふのを見て、靜かに口を開いた

「ブラオン、いや、さすがに君は軍人丈けに、中々細しい議論の立て方だ、併し、我輩には、全然感心することが出来ないね」
「ケルレル」なんだと」

「フロン」勿論さ、なる程、露國には二百四五十萬の陸軍が出せようし日本では、やつと、六十萬しか出すことが出来ない、けれども、君は、露國の二百四十萬の兵隊が、悉く極東に来て日本兵と戦ふことが出来ると思ふかね(此時、側に居た日本人の中からヒヤ／＼といふ者があつた、向ふの亞米利加人の中からパチ／＼と拍手した者が)いざ戦争となると、此大部分は君、夫れ／＼彼の廣大な國境を守らんければならぬよ、でないよ、ポーランドが獨立しかゝるよ、フキンランドに叛徒が起らう、バルカン問題がますます六ヶ敷なる、よし、かりに此邊を守つた残りの大兵を送るにした所が本國から、何千里離れてとても／＼十分な軍需品の輸送ができるものか、だから結局東洋で戦争する兵は、まづ多くつて三十萬位が關の山さ、すると、日本の六十万に對して半分しかないじやな

いか、(又亞米利加人や英國の日本人がするの)又海軍の方だ、コリや、どうしても
 太平洋艦隊とだけでくれば合んけりゃいかぬ、君は、バルチック
 艦隊など盛んに吹きたてるが、彼の大艦隊がはるく、東洋までや
 ツて來られるか來られんか、素人にでも分るこっちゃないか、ま
 して、黒海艦隊は、あの海峡が出られるもんじゃなし、更に裏海
 艦隊などがなんじや、丸で足をもがれた蟹じゃないか、だからさ
 まづ海軍は太平洋艦隊とだけでくれば合ふだね、そうすると君
 軍艦の數の上からいっても、噸數からいっても、日本の方は遙に
 有力だよ、君はたゞ同じ様に、一万噸以上の戦闘艦といふが、日
 本の方の、一万五千噸以上の朝日以下三笠、初瀬、敷島の様な最
 新式の軍艦に匹敵するのが、露西亞には一艘もなからう、夫に

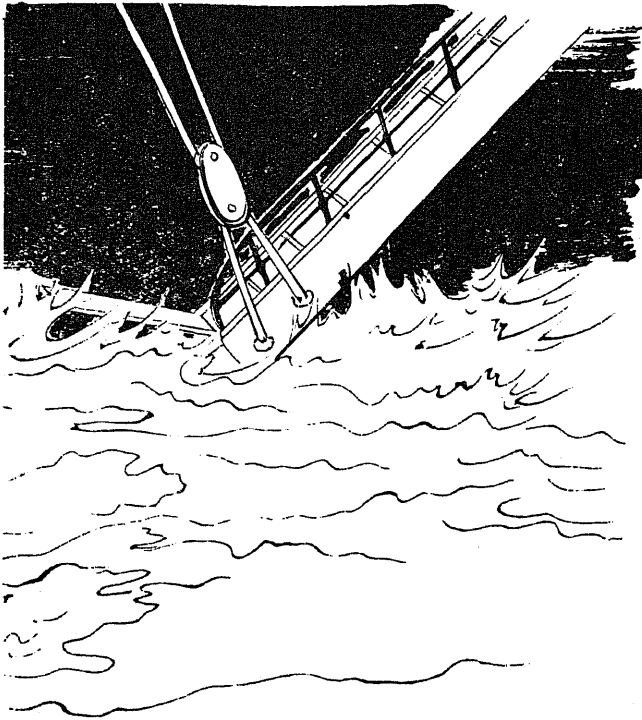
と、いって、手に持って居たシガラの灰を一寸落して、一服すって見て、

「夫に、君は、たゞ無闇と、數の上から許り論じたから、我輩も數の上から辯駁したのだが、いくら數許り多くったって、勝てるとはいはれない、なる程君のいふ通り、コサツク兵も強からう、然し夫は、彼の蒙古兵だの支那の馬賊だの、朝鮮の兵なぞと戦つて強いのだらう、日本の騎兵と比べて見て、どっちが強いかわかるものか、夫からも一つ茲に肝心なことがある、日本はツイ先頃まで、日清戦争だの、北清事件だの、たびく實戦をやつたから、陸軍でも、海軍でも、すっかり、戦争の稽古が積んで居るといふものだ、露西亞はどうだ、なる程、馬賊だの、一揆など

へは喧嘩したたが、有力な軍隊と戦争したのは、クリミヤ戦争この
 かなないじやないか、従つて又、日本の陸海軍は、一切最新式の
 戦術を應用して居る、この點に於て、露西亞の方は百歩も千歩も
 譲らんければならぬと思ふね、夫から、念のため、も一つ論じた
 い、近世の兵術家のいふ様に戦争の勝敗は、主に軍隊の精神に關
 係する、まあ、日本人の愛國心の盛なのを見給へ、とても露西亞
 人などが、誰のために戦争するのだからさへ知らないのとは、丸で
 雲泥の違ひや、上將校は勿論、下兵卒に至るまで、すっかり、
 天皇陛下の爲にすてる命だといつて居る、夫に彼の君の國なども
 關係があるが、十年前のそら三國干渉だ、日本ではひどくあれを
 遺恨に思つて、いつか、敵を取らんければといふので、十年の間

一生懸命に、夫ばかり目的にして、軍隊を練って来たもの、
今に露兵に向ふ時は、丸で一騎當千の兵となるに違ない。
君はたゞ數や大きさの上から議論して、露西亞が勝つに決ってる
様にいふが、我輩は以上の議論によつて、きつと日本が勝つとい
ふのだ、どうた、ケルレル大尉、我輩の議論の方が十分根據があ
るだらうじゃないか」
博學の譽ある新聞記者だけあつて、其見る所、言ふ所は、一層大
尉よりは勝つて居るので、ぐるりの外國人等は一度に拍手喝采し
た。すると、彼のケルレル大尉は、ブルくくと震へ出して、顔
を眞赤にして怒り出した、そして、右の手に確とサーベルの柄を
握つて、

ケルレル「ウン、なる程、君の議論も一理あるだらう、併し僕は服する
ことが出来ない、だから、此場合、僕は君と決闘を望むのだ、さ
あ、プラオン君、用意し給へ」
そら、例の獨逸流が始まつた、決闘を申しこまれて逃げるのも卑怯だから、プラオン君は、どうするかと、皆が片唾を飲んで見てみると



ブラオン「決闘！ まあ、

御免蒙りませうね」

ケルレル「卑怯じゃないか」

ブラオン「卑怯でもなんで

もいく、御免蒙らうよ」

ケルレル大尉は、尙

進んで、決闘を迫ら

うとする中に、ブラ

オン君は、どこへ行

ったか、はや影も見えない、側に居た獨逸人や佛蘭西人は、口ほ

どももない卑怯な英吉利人だと笑った。



森田

其日の夕方であつた、空はますます晴れて居たが、波はますます
 荒れて居た、所が皆と一所に、甲板上に子供を抱きながら散歩し
 て居た獨逸の婦人が、どうした機會だつたか、其子供を波の中に
 落した。さあ大變だ、そら救の船だと皆が騒ぐ間にすぐ上衣をぬ
 いで飛び込んだ外國人があつた、やがて船がとまる、端艇が下り
 た、そして、片手にしつかと子供を抱き上げて遊ぎついた外國人
 を救ひ上げて、本船へ上げて來た、此英雄は一體誰だらうといふ
 ので、皆で集つて行つて見ると、前に決闘を逃げたブラオン君で
 あつた。

側に居る見たる日本人や亞米利加人や其他の外國人は皆一様に、前
 に卑怯といはれた、英吉利のブラオン君こそ、眞の勇者だといつ



て感心した。

猿と左官

左官が、セツセと、白壁をぬ

ておると、

親子の猿が、そばで、見てゐて

さてく、人間といふものは、

妙なことをするなと、思っている、



森田金次

左官が、お晝の休みに行った後
で、

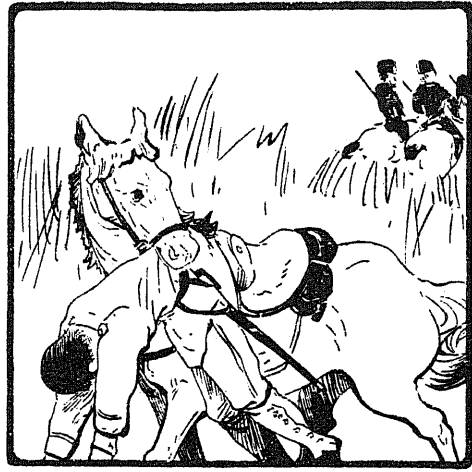
親猿は、残っていた石灰で、子
猿の顔をこんなにも、眞白に、ぬ
ってしまいました

おかしいじゃありませんか。

↓

愛馬主を救ふ

いつか、お馬の忠義なお話をして、いづれ、今度の戦争にも、忠義なお馬のお話などが出るでせう



と置いて置きましたが、案の通り、次の様な面白い話が、新聞に出ましたから、ふしらせします、寒馬集斥候戦の日、我騎兵の小隊は任務の上より

止むなくも敵を見棄て、退却すべき事になった、其時小山田騎兵上等兵は殿騎と成つて来たが、敵の追射撃にわひ左肩胛部を貫かれた、病手ながら先途の場合、堪へ〜て一行の跡をつけ、とある杜の角まで疾驅させて来たが、終に馬から轉落ち人事不省に陥つた

不圖氣がつくと上等兵は何物にかヅル〜と曳きづられ、樹の根で横腹を打つたので驚いて眼を開くと、平生愛してゐる乗馬が上等兵の服を口に嚙へ身を没する計り雑草の茂みへと隠したのであつた、上等兵は吾身も愛馬も無事であつたのを喜び手を上げて其平首を叩いてやると、馬も懐かしげに其鼻面を上等兵に摺付け〜しては首を振るのであつたが、其時敵の七八騎今まで上等兵の倒れてゐた處を馬蹄高く追跡して來其とも心付かずし

て遠く其姿を没して了つた、馬は其を見ると共に
然も安心したる様に一聲低く嘶いたので、上等兵
は初めて吾身の危急の場合を其愛馬が前知して助
けてくれた事を悟り、思はず馬を抱いて感激の涙
を流したとの事である

教を守つて斃れた犬

佛國ピッドフォオルドの或る人は、日頃何んでも棄
てあるものは取て来いと其愛犬に教へて置いた。
處で或る日其人は、家の庭の池の中の鯉を殺す爲
め、爆裂弾を投げ込んだ、すると其犬は突然飛び
込んで其弾を啣へ弾は破裂して終に死んで仕舞つ
たそうです。

お話し三つ

馬鹿の夫婦

ひかし、或所に夫婦者が居て、三枚の餅を二
枚づゝ分けて食つて、残つた一枚を二人して半分
づゝ食はうと言ふと、婦の方のいふには、「夫より
はこれから二人で無言の行の仕較をしよう、そし
て先きに語ふた方を敗とし、勝つた者が、此餅を
食ふことにしやうじやないか」そこで、夫も「夫
がよからう」といふので、夫から二人して夜中ま
で、無言の儘で睨み合をして居た。所が、丁度、
其處へ盜賊が這入つた、そして、夫婦の者が、自
分を見ながら然言であるのを見て、全く恐ろしい
から黙つてるのだなと思つて、そこから中の物を引
き出して持つて行かうとした。そこで、婦はとう
く堪らなくなつて夫に對ひ、「お前さん、男のく
せに、何で盜賊を見逃すのです」と言ふと、夫は

「占めた、己が勝つた」と言つて、一枚の餅を取つて食つて仕舞つた。世間人は、此話を聞いて随分馬鹿の骨頂だと言つて笑つた。

頭と尾との争

むかし、或所に、一匹の蛇があつて、其頭と尾とが争ひをしてかした。先づ頭が尾に向つて議論するには、「己は貴様よりは、ぶうつとえらいのだぞ、己には第一耳といふものがある、目といふものがある、口といふものがある、夫で、物を聞きもすれば見もし、食ひもする、其上行く時は、いつも己が前に立つ、どうだ、尾なんぞよりは、餘程えらからう。」すると、尾も黙つて居ない、「なに、己の方がえらいのだ、其證據には、己がお前さんを行かせるから行けるのだ、そんなに言ふなら、さあ、一番獨りで行けるなら行つて見るがよ

い、といつて、いきなり、側の木に尾をくるくると三回り半も巻きつけた。三日目になつてから、どうも、腹が空いてならないから、頭が食を求めに行かうとしても、行くことが出来ないで、飢餓に迫つて、とうとう頭も降参して「なる程、貴様をえらいとするから、はなせ」といつたので、尾は「そーら、どうだ」と曰つて離した。そこで、頭は尾に向つて「今度は貴様がえらいのだから、前へ行け」といつた。尾は得意になつて、前へ行つた、そして二歩三步行つたと思ふと次の坑に墜ち込んで死んで仕舞つた。

狐と獅子

ある時、狐が獅子と仲よしになつて、いつも獅子の後について乞食をして、獅子の残りものを貰つては喜んで居た。一日のこと、獅子は腹が空つても

食を見付けけない、そこで、いつもの通り後についで来た狐を捕つて食はうとした。狐は驚いて、何故私をお食ひになるのですといつて歎くと、獅子は「なに、平生、己の食べ物を分けてやつて、お前を肥やして置いたのは、全く今日の様な時の爲にするのだ」といつて、とうとう殺して仕舞ひました。

怠惰者の祈禱

三河西加茂郡筋生村 近藤 登喜子

或る處に、仕事と云つたら爪の垢程もせぬと云ふ怠惰者がありました、家は、だん／＼貧乏になりそれに反し、子は、思はぬ程殖え遂には日に三度の粥水が呑めかねる様になりました、或日の事、妻は夫に向ひ、ア、妻程因縁の悪いものは、世に

つれわらまじと、嘆き訴へました、すると、夫、私も最前から、妻子が不憫である、どうにかせむと、日夜心を痛まして居る、ヨシ今から氏神様に祈誓を掛け幸福を與へて貰はん、とすぐ其の日から七日の断食祈誓を掛け一心不乱に幸福を祈りました、すると六日目の夜丑の刻頃、氏神様が、白髪の翁に化けて出てきまして聲を怒らし、これ怠惰者め、其の方の断食して幸福を祈るは全く感心は出来ない、断食は其の方の常なり、祈るなら満腹になつて祈れ、と言ひ放して消へ亡くなりました、怠惰者は七日の祈誓も水の泡となりて家に戻りました、其れと云つて家内食はずに居る譯にはをれぬ、氏神様へ祈るには空腹では聞き届けがない、さて困つたと手を拱ぬいて考へて居りました不圖思ひ付き、自家に祭りある大黒様に祈誓を掛

けん、今度は三七二十一日の間夜丑の刻より夜明
 がたまで、夫婦力を合せ、一生懸命に祈つて居ま
 した、すると、廿日の夜疲れて二人りともねむり
 初め、終に夢を見ました、其の夢が二人りとも同
 じで、大黒様が金銭を得る方法を教へて遣る明朝
 来い、との言葉を聞きました、依て二人りは嬉し
 く喜んで、夜の明くるを待て、身を清め、恐るゝ
 大黒様の前へ行き仰向きますと、神棚から七夕紙
 が下つて居ました、受けとつて、夫婦共に讀ひで
 見ますと

金銭は此の世の中に預け置く

慾くば遣るに働いて取れ

二人りは、毎日ねころんで居て、金銭を貰ふ積り
 であつたに、案外なるに驚きました、致方があり
 ませんから、其の翌日から日傭取りに出掛けまし

たか、とうく仕舞には、大黒様のお告の様に、
 澤山なお金が出来ましたとさめでたしく



婦人と子ども



慎教鏡といふ書物をよみて

此夏、暫く豆州の山間に微癩を養うて居つた徒然の折、隣室の客から借り得た書物の中に、家内和合慎教鏡と題する一書があつた。慎話會主三輪觀勝といふ人の著述で、標題の示す通り、慎といふことを基にして、家族的實踐道徳談を極めて卑近に記されたものである。其中の面白いと感じられたものを左に引いて見よう。家庭教育の目的論や、スキート、ホームの理想談に腦漿を費さるゝ方々に取りても、多少、頭休めの材料ともならうかと思つて、

物知らず一覽

天皇陛下てんのうのうへいか のありがたき御恩おんを知らず。

今有いまつて後あとなき命いのちを知らず

四海かいに福祿ふくろくのある事ことを知らず

人は一代名だいなは末代まつだいといふ事ことをしらず

火水ひみづとかいて神かみといふ事ことをしらず

主人しゆじんや親おやに大恩たいおんある事ことをしらず

信心しんぎんはまことの心こころといふ事ことをしらず

我身わがみは借りものといふ事ことをしらず

正直しやうじきに徳とくのある事ことをしらず

うそをつけば心こころの痛いたむといふ事ことをしらず

何事なにごとも我われにあるといふ事ことをしらず

人の非ひを咎とがめて徳とくのなき事ことをしらず

心こころにござらば血ちもにござるといふ事ことをしらず

ふばけは人の心こころに在あるといふ事ことをしらず

神明しんめいの有ありたき御恩おんを知らず

日月にっげつの廣大こうだいの徳とくを知らず

財ざいはくちても誠まことはくちぬといふ事ことをしらず

心の善惡ぜんあくは必ずかならずはへるといふ事ことをしらず

神かみのおかげで生いきて居ゐる事ことをしらず

衆人しゆじん他人たにんに恩おんある事ことをしらず

無理むりの願ねがひは叶かなはぬといふ事ことをしらず

知惠ちゑでは富貴ふうきになれぬといふ事ことをしらず

病根びやうこんは氣きぐせのこりといふ事ことをしらず

懺悔ざんげして跡腹あとはらのよき事ことをしらず

人をにくめば我われもにくまるといふ事ことをしらず

心程こころほど尊たうときものは非あらずといふ事ことをしらず

いかり短氣たんきに徳とくのなき事ことをしらず

鬼おにと地獄ぢごくは心の内こころうちといふ事ことをしらず

りんしよくは畜生道に入るといふ事をしらす

大へいは悪げなものといふ事をしらす

まけん氣の強きは運を敗るといふ事をしらす

みえとかざりは壽命を縮るといふ事をしらす

自然にまかせて徳のある事をしらす

わるちえは我身を敗るといふ事をしらす

人の嫌ふはいつこくものといふ事をしらす

目先の慾は後の害になるといふ事をしらす

玉磨かざれば光りなき事をしらす

之に附加したく思ふのは

理屈ばかり知つて行ふことを知らず、所謂、論語讀みの論語知らず。次に

こそ

といふ字の使ひ方を面白く解釋して

(前略)また、この二字を向ふの人につけて見るべし。是を何れも己れにつける時には、我なればこそ、おまへさんの様なる腹立やを亭主にして居るなり、なか／＼よそのおかみさんでは辛抱をするもの

へんくつ片いちちは愛敬なき事をしらす

大食と朝寐は損といふ事をしらす

ねたみそねみは罪といふ事をしらす

頭痛は愚痴の考から起るといふ事をしらす

氣をもんでは成就せざるといふ事をしらす

自分勝手は損の種まきといふ事をしらす

人の心は鏡といふ事をしらす

大慾は形の外といふ事をしらす

教を聞くは人に勝れたる徳といふ事をしらす

かと女房いばるなり。また亭主は我なればこそてまへの様な愚痴たら〜の者をも女房にするなれといばるなり。我の方へこのこそをつける故世の中は治まらず。(中略) このこそも己につけるはまんしんなり。世に高慢ほどにくげなものはなし、歌に「このこそを向ふにつけて我れなしに至らぬ我をしるぞ慎身

とある、頗る面白いが然し、之も見方一つで、こそを自分につけて「我が徳が至らねばこそ我を恨むのだらう」我が智が至らねばこそ此過を仕出かしたのだらう」といふ風に考へるのも亦必要だと思ふ。一體このこそといふ辭は、特別に之ぞと取り立て、云ふ意味があるのだから、自分を善いと考へて自分の方へつける、此書物にある通り「吾こそ」「吾なればこそ」などいつて、頗る高慢に聞えるのだが、自分を悪く見て附けると、一層謙遜した意味になると思ふ。

夫から、左の二通りの道歌は、各自暗誦して、心に銘する時は常に家内の平和、交際の圓滿、實行の篤實の好指針となると思ふ。

活物の道歌

和合の家 慎しめば世界に敵は更になし皆身内ぞと人も喜ぶ
不和合の家 慎しめぬ家は身内も敵となり心の地獄落て苦しむ
金持貧乏 金銀を積と雖ども強慾は心ろ苦るしく是れぞ貧乏

貧乏の長者 貧乏をしても歡ぶ心ろには福祿壽命宿るなりけり

亭主の心得 女房は嬉しきものと喜こべば是れ一生の守り本尊

女房の心得 御亭主は實に大切と崇めれば運も盛んに昇る幸福

夫婦和合 女房はお客と思ひ御亭主は國君殿と思ひくれば

寶船 目の覺て機嫌の能が寶船日々のり給ひ夫婦中よく

七福人 喜ぶと不足も留主でふくが來る夫婦喜ぶ内は福々

程 心得て心得ちがひする心まこと心になれよ一心

慎に人々先は 慎みて己れ一人を慎めはひとり種で天地一ぱい

そしるとも 人様が何といふとも夫はそれ人に構はず慎むぞ人

恩人 己が非を譏る人こそ有難や運をなすは是が妙藥

貧福 和合して樂む家ぞ福多し福がいやならいつもむしやくしや

短氣は損氣 強い氣は我身の敵と知れたなら我を遜り人を敬へ

積金 日に一つ慎み守る人ならば月に三十よき事ぞます

三善 口一つ心に一つ身に一つ日々に三つを守りてや見ん

繁榮の元 不景氣は己れで造る胸の非と我が非を知らばいつも繁昌

聞て吃驚り 一日に五錢の錢をつむ時は壹年経ば十八圓となる

天恩人の寶 修行とは智慧やか金は入らぬもの息の御徳を知るぞ慎しめ

神信心 願ふ事あらば御託を先とせよそれから願へ諸願成就を

足事を知る 衣食住不自由なき身の人よりも心に不足なきぞ尊とさ

信心の徳 愚痴不足いはぬ御方が信心のよろこびえたる神の御利益

人は小天地 天理我體文字が讀たら世の中は日々樂しみに今日も朝から

慎 慎は心靜に身をかるく我が行のよしあしを知れ

つゝしみのはやりうた

一ツトセ 人のいやがる我儘を直す其身がたからなり。こりやつゝしみぢや

二ツトセ 夫婦喜ぶ御家には子孫かゝやくしるしなり。こりやつゝしみぢや

三ツトセ みてもきいても慎みは何につけてもくすりなり。こりやつゝしみぢや

四ツトセ 四方の御方に響られて此よあのよとたのしめよ。こりやつゝしみぢや

五ツトセ いつも心のくらやみを慎みひらけば明とくじや。こりやつゝしみぢや

六ツトセ ひかっぱらから喧嘩する是は心のたらぬゆえ。こりやつゝしみぢや

七ツトセ なま物じりては耻をかくしらぬと正直懺悔せよ。こりやつゝしみぢや

- 八ツトセ 役にもたぬと越をしてはねられぬ老のくせ。こりやつゝしみぢや
- 九ツトセ 心ひとつを慎めば其身そのまゝ神はとけ。こりやつゝしみぢや
- 十トセ とても行かれぬ極樂も唯今こゝにとわらはれる。こりやつゝしみぢや
- 十一トセ 一に慎しみ二にかせぎ三に忠義とかうこうせよ。こりやつゝしみぢや
- 十二トセ 憎ひか愛はいろはなり習へばあがるぞ慎しめよ。こりやつゝしみぢや
- 十三トセ さんだん苦勞は入らぬ者無我となるのが目當なり。こりやつゝしみぢや
- 十五トセ 極樂世界はいづくなる慎むかはらの中にある。こりやつゝしみぢや
- 十六トセ 六根清淨の人となり心は神ぞとわがめみよ。こりやつゝしみぢや
- 十七トセ 七なんへんじて七ふくとなるも慎しむ人にある。こりやつゝしみぢや
- 十八トセ 八方ふさがり今はさえ十方世界がわが物ぢや。こりやつゝしみぢや
- 十九トセ くにも天下もつゝしみで恩をほうじる人となる。こりやつゝしみぢや
- 二十トセ はたから笑ふもかまやせぬ我は一心慎しみぢや。こりやつゝしみぢや
- 廿一トセ いちくこたへる慎みも行ひなければ益はない。こりやつゝしみぢや
- 廿二トセ 二度と出られぬ世の中で慎む人こそめでたけれ。こりやつゝしみぢや
- 廿三トセ さんざはたらきその上は心の樂こそ開運か。こりやつゝしみぢや

廿四トセ 死ぬも活るも我にゐる是がしれねば氣の毒ぢや。こりやつゝしみぢや

廿五トセ 五あく十あくすてゝみよ十ぜん保つの人となる。こりやつゝしみぢや

どうか、お互に、か様なうたを暗誦したいものと思ふ。

終りに、慎話丸の効能一覽繪が出て居る、繪は略して、其功能書といふのは、實に左の通り

慎話丸

●功 能

一、夫婦中惡敷離別病によし
一、親子中惡敷喧嘩するによし

一、人を讒り又は憎み腹立によし
一、取越苦勞にて寢られぬによし

一、吞すぎ食すぎ胃病によし
一、上を見て氣ばかりのぼるによし

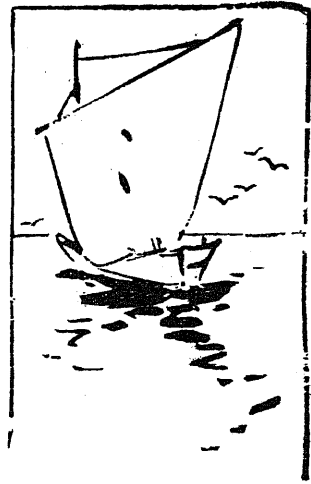
一、高慢にて人を見下す眼病によし
一、亭主を尻に敷女房の病によし

一、子宮病一切子の出来ぬ婦人に別而妙なり

用法、丸吞は効能うすし能々かみしめて朝夕服用すべしいかなる難病又は慢心病にても全治保證なり

常に陽氣を以て行く時は其功尤も多し陰氣は其功薄し併し邪陽は其身に害至るものと知るべし云々

(杖 羊)



牛乳検査法

かはむら

近頃人々が大に体育に注意する様になつてから牛乳の需要頓に増し、従て其供給も増加すると同時に往々粗悪のものを供給する様になり、折角自己の養生の爲めにせんとするものが却て自己の体を害する様なものもある様である。

そこで折々之を検査するの必要がある、又其検査の方法も一困難でないから、一般人が之を心得

て居る必要があると思ふ。

よい牛乳は、攝氏十五度の時に其比重一、〇二九乃至一、〇三三であつて其百分組成は

水	86.0—89.5%	平均	87.7%
脂	2.7—4.3%		3.4%
含窒素物	3.0—4.0%		3.5%
乳	3.6—5.5%		4.6%
薬物質	0.6—0.9%		0.75%
			100.00

であつて固形分の總量即ち脂肪より薬物質までの量の和は、一二、二五パーセント、其残りは水である、牛乳の性状は不透明の白色か或は稍々黄色を帯ぶる液体であつて、少しく甘き脂肪様の一種の味と固有の臭ひをもつて居る。

反應は酸性とあるかり性との兩方の性質を示し、

久しく煮沸しても固まることがない。

牛乳の質造の主なるものは

第一、水の注加、

第二、半脱脂(二部分の脂肪を除去せるもの)、

第三、水の注加と半脱脂、

第四、他物の注加、之には容積を増すために米の

洗ひ汁、或は豆汁を加へ、或は腐敗を防ぐため重

曹、サリチル酸、ホルマリン、硼酸等を加ふるの

である。

牛乳を試験するに警察的試験法と、化學的試験と

ある、前者は後者よりは精密でないけれども、敏

活にする事が出来るから今茲には是のみを述べる

一、色、味、臭を檢し、全乳なれば前に述べた様

な性状を有つて居る、脱脂乳とか又は注水乳なれ

ば其縁の部は藍色を帯ぶ。

二、試験紙にて反應を檢すれば、新鮮のものは兩

性反應即ち前述の酸性と、アルカリ性との兩方の

性質を有つて居る、而し少し位酸性反應のみにて

も飲料に妨げはない、無論其酸性が強ければ酸敗

せる證據であつて、決して飲料に供すべきではな

い。

三、比重を計るに、尤も普通に用ふるはクエヴニ

一、ミユラーの乳稠計といふものである、此物は

下膨れの硝子管であつて、下方に鉛の粒を入れて

重りとなし、上部には十五度より四十五度までの

目盛りを施して居る、牛乳を細長い器物の中に入

れ、之に此乳稠計を浮ばす、もし牛乳液の上面が

十五度を示さば其比重は一、〇一五にして、二十

度を示さば一、〇二〇である、他皆之と同じ、但

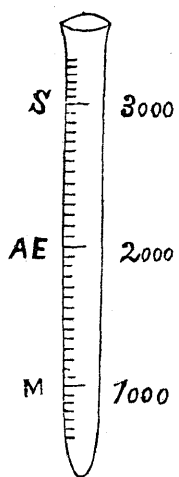
し同時に其牛乳の温度を寒暖計にて計り、其温度

が十五度以上ならば一度毎に〇、〇〇二を加へ、十五度以下ならば一度毎に〇、〇〇二を減ず、例へば乳稠計の度数は三十にして寒暖計の示す温度が十八度であるならば一、〇三〇より〇、〇〇二の二倍即ち〇、〇〇四を減じて一、〇二六となるのである。

牛乳に於て比重の不足な事は、即ち固形分の不足な事では無いが、又あまり比重の多い過ぎるのもよくない、之には一定の範囲がある(後述)然るに前にも述べた通り、牛乳の比重は一以上であつて、水の比重よりも大である、故に、之に水を入れると云ふと比重が軽くなるが、然し脂肪は水より余程軽いものである、そこで牛乳から脂肪を取り去る(脱脂)之に水を加ふ(注水)れば適宜の比重を保つ事が出来る故に單に比重のみを計

れるのみにては決して其良否を知る事が出来ない必ず其脂肪量を計つて見る必要がある。

四、脂肪檢定に尤も簡單なる方法はマルカントの乳脂計といふものを用ふるのである、圖に示すは



マルカントの乳脂計にして硝子管に

圖の如き目盛を施せるものである、Mはミルクの頭字、AEはエーテルの頭字、Sはスピリットの頭字にして、アルコールの事である、各區劃は各十立方センチメートルの容積にして、又Sの部の上方及び下方に稍々細かき目盛りがあるが之は十分の一立方センチメートル宛の容積を示して居る、先づ之にMの處まで牛乳を入れ、之に比重一、二六

乃至一、二七の苛性加里液を三滴加へてよく振盪し(もし加里濾液がなければ入れざるも差支なし)次に其上にAEの處までエーテルを入れ木栓にて固く栓して強く振る、此際振り方が不足であれば脂肪の全量が溶解しない恐れがあるから充分よく振る事が大切である、次に其上に九十乃至九十二パーセントのアルコールを加ふ、又密栓をなして強く振盪す、よく振つた後攝氏四十度の温湯中に十分間浸し、次に二十度の水中に三十分乃至一時間入る、時は上方のSの部の周圍に脂肪の層が浮き上る、それを其部の細かさ度盛りにて讀み其度数によりて脂肪量を計る、之には一定の表かありて之を見れば直ちに分る様になつて居るのもあるが又下の公式によりて計算するも易きことである。

乳稠計の度数 $10-16.5^\circ$ の時 $F = ax + y$

F は脂肪量(パーセント) a は乳稠計の度数

$x = 0.204$ $y = 1.135$

乳稠計の度数 $16.5^\circ-18.1^\circ$ の時 $F = ax - y$

$x = 0.328$ $y = 0.948$

$18.1^\circ-21^\circ$ の時 公式全じ

$x = 0.354$ $y = 1.420$

$21^\circ-52.5^\circ$ の時 公式全じ

$x = 0.498$ $y = 4.438$

此方法の原理は牛乳にエーテルを加へて其脂肪をとかし之をアルコールにより他の部分より分離して其量を見るのである、此際に注意すべき事は、検査の前によく瓶中の牛乳を振盪し、各部一樣の状態となれるとき其一部を取りて之を検する事である、然らざれば脂肪は軽さが故に上方に浮び出で、検査の結果脂肪が非常に多かつたり、又少か

つたりする恵びがある、又乳稠計乳脂計などは案外廉價のものであるから之を買ひ求むるに容易である、又アルコールとエーテルも一瓶宛買つて置けば永く用ふる事が出来る、但し栓を密にするには必要である、左に比重及び脂肪量に關する内務省規定を擧げやう

比重、攝氏十五度の時

全乳 一、〇二八と一、〇三四との間

脱脂乳 一、〇三二と一、〇三八との間

脂肪

全乳 二、七パーセント以上

脱脂乳 〇、五パーセント以上

地方長官は此規定の範圍内にて適宜に斟酌規定すべし事となつて居る、脂肪量などは矢張り三パーセント以上でなければならん様である、米の洗ひ

汁を入れて居るか否かは澱粉の試験によりて之を知る事が出来る、即ち牛乳を沸騰し冷やしたる後醋酸を加へて乾酪素及び脂肪を沈澱せしめ、之を濾したる液に沃素(沃度丁幾にてもよし)を加ふれば藍色を呈する事により容易に知る事が出来る牛乳に豆汁を混せるものにては沃素にても色の變化がなく、又豆汁を入れたる牛乳の色、形状、比重等にても大差なく豆汁を三十パーセント位まで加へたるものにてても極めて僅かの脂肪の減少があるのみで内務省令に不合格となる様な事がない故に之は顯微鏡検査をするの外がない、四十パーセント位入るれば多少生豆腐の臭ひを感じ脂肪の量著しく減するので分る。酸敗に傾きたる牛乳に重曹を加へて販賣することがある、これは試験紙にて檢すれば著しくアリカ

リ性の反應を呈するにより知る事が出来る。
其他サリチル酸、ホルマリン等あれども少しく手
敷であるから略します。

貞一の日記(抜萃)(明治三十六年五
月卅二日生男兒)

その母

明治三十七年七月十五日 母學校より歸れば、今日
は十時過ぎし頃より熱出でし様なりと、ばあや
はいふ、計れば 卅八度五分あり、例よりは少
く機嫌悪し、夜はよく眠る

かゆ 一回(二盃) おもゆ三回 乳一回 夜一回
午前六時 起 午後六時 眠る 午前中一時間 眠る
七月十六日 熱なほ去らず 醫師の許に行く 初
めほど 胸腹など 見らるゝ時は ほとなしかり
しも、舌を見んと、口を無理に、開かせしより、

大聲にて泣き出す、

おもゆ一回 乳晝三回 夜二回

午前六時 起 午後八時 眠る

七月十七日 機嫌あしく、乳ばかり飲みたがる、

おもゆは例の半分ぐらゐづゝ飲む、夜に入りて

急に熱度昇り、卅九度六分あり、使を馳せて、向

野醫師を迎ふ、

おもゆ三回 乳晝二回 夜二回

午前五時 起 午後十時 眠る

七月廿一日 千葉より伯母君遊びに來られたり、

初めほどは はづかしがりしも 直に馴れたり、

晝寝して起きし時 伯母君抱きとられしを 母と

おもひしか 懐をさぐる故 傍にて 母笑ひしに

大聲にて泣きだす、
ピヤノを弄ぶ時は 必らず本を片手にまくり 片

てにて弾く様 さながら譜を見てひくつもりらしく見ゆるも可笑し。

おもゆ三回 乳晝三回 夜一回

午前五時半起き 午後八時眠る 午前中一時間

午後三時間眠る。

七月廿二日 上の齒四枚になる

七月廿三日 雷鳴の烈しさに 恐れて母に抱きつ

きて離れず

七月廿七日 母に負はれて、金刀比羅神社に行き、

神樂殿の屋根に、赤く塗られし、唐團扇の紋を見

つけ、エー〜と指さす。

七月廿八日 父の肩を叩かせ居るを見 自分も父

の傍によりて 肩を叩く

七月卅一日 ビンボンの球を、板の間にて 彼方

此方へ投げ、ボン〜とぶを見て、大聲を出して

笑ひ 這ひまわりては喜ぶ、此の頃は馬の玩具に、車のつきたるものを、好きになり、いつも〜、

あちこちと、おしまわして遊ぶ、其他一體に帽子

でも、茶碗でも、どこまでとなく押し回はして這

ひ行くなり、機嫌はよろしけれど腹工合まだなを

らす(十七日發熱後は別に經過に變なく廿五日頃より日に四五回づゝ便通あり)

八月二日 今日まで、診察をうけ居りし醫師へは

行かず、内田といふ小兒科専門の醫師の許へ行く、

左程心配する病氣にはあらず 直に快くなるべし

との話に やう〜安心したり、

おもゆ四回(二梳づゝ) 乳晝二回 夜二回

午前五時起き 午後七時半眠る

晝寝 午前中一時間 午後三時間

八月四日 腹工合大によし、ババ〜とつゞけて云ふ

八月六日 醫師の勧めもあり、また両親の身体のためにもよろしからんと、温泉行を思ひ立ち、伊豆國修善寺に向ふ、十二時卅分の流車にて、新橋を出づ、偶然父母の全郷人にて、山本貞之助氏といふ方、其奥様、また佐々木信綱先生 など親しき方々と乗り合す、流車の動き出しより、物は珍らしきか、大きな眼をはつて、きよろ〜と外を見る、皆様の前にて 自分の藝を、すつかり御目にかけて、はめていらく、第一番にとつと、目次に萬歳といへば両手を上げる事、てうち〜あばい、かつひてん〜は近頃出来なくなれり、もはや卒業して仕舞つたのだと父はいふ、山北より三島につくまでは眠りてさめず、大仁より流車を降りて、人力車にて、修善寺に行く間、日は暮れ方になりて物淋しきか、父に抱かれながら、

母の車を、見かへりては、しく〜と泣き出す！
母の車、父の車より先き立てば、大聲にて叫ぶ、

かもゆ二回 乳五回、吉野せんべい一枚

午前五時 起 午後九時 眠る 晝寝三時間

八月七日 宿は大川といふ、座敷は 松の間とて

八疊敷なり、隣室に まさよさんといふ、可愛らしき、四歳ばかりの女兒あり、一所に遊んであげ

ましようと、傍へ来てくれれば、胸をついたり

また顔を つかみかゝつたり 亂暴をしては、可

愛い、姉さんを 困らす、

三階の階段を 獨にてすん〜昇る 母兩手にて

後紐を 押へ居れば エ〜といつて拂ひの

ける。

かゆ一椀 葛湯一椀 鶏卵二個 乳三回

午前五時半 起き 午後六時半 眠る

八月十日 隣室のまさちやんの一組は 歸られて
 其の跡へ移る。こゝは鶴の間とて 十疊敷なり
 其の隣の 伯母さん 暑いでしようよと 間の唐紙
 を 明け放して下さる 貞一は 廣くなつたのと
 にぎやかになつたのとを よろこびて 隣室の方
 へばかり這つて行く
 今日より 柱の霜といふ、此の土地の名産で、自
 然薯より製した葛を 飲まして見るに 結果よろ
 しきやうなれば これを 主要な食料にあつ
 八月十二日 隣室の柱に 夕日さしたるを見て
 うれしそうにエー／＼といひて指す
 八月十三日 昨日の夕日の影を 思ひ出せしか、
 柱の下に行き、物をさがす様子しては、這ひまわ
 る、椽側をわちこちと 椅子をふして歩く
 八月十四日 此頃食ひつく事 益々甚し、宿の女

中など、入らつしやいと、言つて近づくと時は、わ
 ざ／＼手を出して、女中の手を捕らへ、かみつく。
 帽子といへば、帽子のかゝれる所をば見る。
 八月十五日 日暮れてより 隣室の四人連と、父
 母につれられ、修禪寺に詣でしに、参詣人の余り
 強く鈴をならせしに、驚き大聲にて泣き出す、
 八月十七日 父母と見晴しの山上に行き、歸途皆
 宜園といふ、遊園に釣して遊ぶ、宿の女中、小魚
 をすくひ瓶に入れてくれしに、ピヨ／＼ととび
 出すを見て氣味悪がりしも、終には兩手を入れて、
 かきまわす。
 帽子を渡せば、必自ら頭にいたゞく、外より内に
 入れば直に、取らんとす、心ありてか 心なしに
 かはわからねど、おもしろし。
 八月十九日 父の齒磨楊子を、口にして、齒を磨

くまねして遊ぶこと久し、

八月廿二日 父風邪の氣味にて、終日臥す、貞一

枕許にすわりて 團扇もてあふぐ。

八月廿四日 獨按摩といふ、くりもの、道具あり、

それを渡し 母の腕をさすつてと 手眞似して

見せしに かもしろがりて 母の腕を なでまわ

す、

八月廿五日 今日十時半修善寺を出立す 大仁に

て 瀟車の來るを待つ間 父母の辨當など使ふ中

茶店の小女に負はれて遊ぶ、廿日ばかり、種々の

人に馴れ親みて、人見しりせぬ様になりたり瀟車

にのりては 例の大きからぬ眼を、強いて見張り、

外をさよろくと見る事、前日の如し、

歸宅早々 例の居間にて 貞チャンの御家と 宮

様はと 問ひこゝろみしに 直ちにその方を指

して笑ふ

廿日間 山間に轉地したる爲 著しく肥満し 留

守居のばあやを驚かせたり

松方伯海外貯金のはなし

▲歐米相競ふて貯金を奨勵す 歐米諸國では、非

常の熱心を以て奨勵して居る、隨て其方法も百方

講究するといふ有様である、白耳義わたりでも郵

便貯金の金高は驚くほどに上つて居る、其方法は

大抵郵便切手を貼用する方法であるから、當に取

扱ひの簡便なのみでない、子供なども貯金するこ

とを一つの樂みとするほどであるから、自然盛ん

に行はれることになる、私は細かな表なども集め

たが、但れの國も何分金高の位が日本と雲泥の差

のあるのは耻しい

▲五千万や一億は容易なり 若し日本の四千五百万人が假に一圓づ、貯金を有つて居るとすれば、即ち四千五百万圓は寢金で生きて来る道理で、二圓づつとすれば九千万圓、三圓づつとすれば一億三千五百万圓となる、此れ丈の金を生かして使へば何んなものであるか、一方には勤儉の風を養ふとが出来、地方には國家は之れに依て大きな仕事する實に一舉兩得とは此事である。

▲填國の方法は尤も妙 乃で色々の方法もあるが私の感服した一つは填地利であつて、夫れは何うするかといふと、例へば甲の客が乙の呉服屋から百圓の買物をする、スルと乙の呉服屋は一つの紙片を持って甲の署名と金高の書入れを求め、而して乙か此書付けを郵便局に持て行けば、郵便局には完全な臺帳が備へてあつて、甲の貯金から

拂出して乙の貯金に加へるといふ手續まで、ツマリ此書付けは手形の代りをする譯けで、甲、乙の貸借が振り換はる丈けであるが、實際の効用は眞に廣大なものである、此方法が填地利のやうに一般に行はれるれば、手許には一金も有たなくつても宜い、臺所の小拂ひまで此便法に由るのであるから、苟も金が入れば直に郵便局に預け入れて置く、引出しの必要があれば右の手續で預金幾分の權利を其對手に譲り渡す、夫れ故一旦郵便局か預かつた金の大部分はチャンスとした用途に充つることが出来て、現金が散らばらに世の中から隠れて仕舞ふ心配がない、現に牧野公使の所でも此方法を行つて居るので、手許に澤山の金を置く苦勞がないといふことである。

▲貯金の廣告至らざるなし 斯ういふ風に貯金を

獎勵して居るから、其廣告手段も至らざるなき有
様で、有らゆる場合を利用して居る獨逸などでは
列車の中にもまで廣告がしてある。



家庭に於ける所感 (承前)

長野縣 飯塚忠次郎

(五) 家庭の花

家庭の花、家庭の福音、そも何者の名稱でせうか
即ち小兒そのものではありませぬか、實に小兒は
ど無邪氣で、天真爛漫で愛らしいものは世にはま
たとありませぬ、彼等の愛らしい口唇よりは斷
へずたのしい慰藉の言葉、否一種の言ふべからざ
る音楽のしらべがわきいで、家人も之が爲めに
慰められ憂きことも之がために忘れるのです、誠
に家庭に於ける最大なる慰藉者はこの花の如き神
の如き表裏なき小兒で御座います、そこで、彼等
を養育するにはうかつには出来ません、餘程氣付
けないとへんば人間ができあがつてしまいます
又、進歩發達の早いことは彼等の最も歓迎すると

ころの玩具おもちゃを見ても容易りに理解りか致いたされます、一寸ちゆうと一例れいをひき來きたつてお話し致いたさうなら、朝あさに風車かまどまをもつてよろこんでゐたのに、夕ゆふには早はやそれよりやゝ高尙かうじやうなるものを望のぞむと云いふ次第さいだいで、俗ぞくに「あさる」といふのが小兒しょうにの謂いはゆる發達はつたつ時期じきと思おもひます、かように智慧ちゐも精神せいしんもからだにつれて發達はつたつするものですから、之これが任にんにあたらるゝ家人かじんは深ふかく熟慮じくりよして養育やういくに着手ちやくしゆせねばなりません、小兒しょうにを温ぬる順じゆんにそだてるのも我儘わがままにそだてるのも、皆みなな家庭かていに於おける教育けいふくの良否りやうひの關くわんする事ことで大おほに三省さんしやうを要えうすべきことです、小兒しょうにの性せいとして見みたこと聞きいたことをすぐに眞似まねをしたがるものですから、一家いっかの人々ひとびとはたれかれの論ろんなく、お互たがひに自己じこの一舉一動きよぶどうに平素へいそから注意ちゆういが肝要かんえうであります、虚言きよげんを云いへば其眞似そのまねをする、學校がくこうの話はなしをすれば自分じぶんもいつしよ

四十八

になつて話すといふように、萬事善惡ばんじぜんあくの區別くわつべつなくむやみやたらと何でも眞似まねをしたがるものですか、之これを教おしへて完全かんぜんな發育はつりくをなさしむることはなかなか以もつて六つか敷しい事ことで御座ございます、小兒しょうにを養育やういくするのは丁度てうど一の植物しよくぶつを養成やうせいすると同一どういで、花はなを咲さかせたり實みを結むすばせたりするのは園丁えんていの法策ほうさくを御座ございます、同一どういの培養ばいようの良否りやうひに關くわんすることで御座ございます、同一どういの花實くわじつでもよいものとわるいものとあります、これは園丁えんていの培養ばいよう如何いかんによつてどうでもなりません、熱ねつ心しんに忠實ちゆうじつにやつたものと不熱心ふねっしんに無責任むせきにんにやつたものとは何事なにごとによらず、其結果そのけつたに至いたつて非常ひじょうな差異さ異いが生しょうじてまゐります、全く之これと同様どうじやうの理りで小兒しょうにもしつけの善惡ぜんあくによつてどうでもなりません、此責このせき任たんは何者なだものがつくさねばなりませんまいか、世よの親おやたる人ひと、殊ことに母ははたる者ものに最大さいだいなる義務ぎむがあることと

思ひます、我國前途の國民は各自の家庭より養育せらるゝことと思へば、實に其責任は大では御座りませんか。

(六) 小兒と命令禁止

現今世間一般の小兒の教育法の有様はどんなでありませうか、果してよく行きとどいてをりませうや、なかなか以て思ふたよりも悪い弊害があるの御座います、それは外でもない早いお話が、多くの小兒は父親の命令したことや禁止したことに對しては同意するが、之に反して母親の命令禁止には一向同意せぬのみか色々な事をいふて服従しない、何故に小兒が母親の命令禁止に應じないか、之を表面(皮想的)から申さうなら如何にも子として親の云ふ事に服従せぬことは今更申すまでもなく誠にわるいが、一步退いて考へたならどうであ

ろう、これは小兒其者に罪をぬりつけるやうなもので酷ではあるまいかと思ふ裏面(原因)からよく推究していつたなら殊に母たる人其者に大なる罪があらうかと存じます。(未完)

亞米利加の女權

亞米利加は女權が盛んで然かも仲々役に立つ女が澤山居るが今同國で婦人の働き手を尋ねて見ると技術家が四百八十四人辯護士が一千三百人醫者が七千三百九十九人葬儀請負人が三百廿四人も居るそうだと

雑感

在東京 平 岩 繁 治

子供に持たせる手帳につきて。子供に持たせる手帳には様々あつて、其の大小といひ、形といひ、紙質といひ色々ですが其れ等の方面に向つても便利で、丈夫で、然かも安い者を撰ぶ必要がありま

すが、もつと大切な事がありません、それは手帳類の表紙に就てであります。

其の表紙に就て一言いはざるを得ざることは、其の表紙の工合、取り所のなと者を書きちらしたのが澤山あります、かゝるものは子供に害になればとて益はありませんでありますから、何か取り所のあるものを撰ばねばなりません、そこで取り所のあるものとは何でありませしよーか即ち道徳上、或は歴史上とか言ふ風なものを書きあらはした者でなければなりません、たとへば楠公訣別の圖とか、子供が父母祖父母につかへて居る圖とかいふ様なものをかいたもので、然かも子供が見て此の畫はなんであるか直にわかるものがよい、そゝすると子供は其の手帳を出して見る毎に其の感念が頭に表れて来て、いつか知らずの間に於

て道徳上歴史上其の他種々なる感念を養成する事が出来ます、それでありますから子供に手帳を買つて與える時等かゝる考がなければなりません又手帳等を他所の子供等に送つてやる場合にも其の考が必要であります、尙手帳の表紙の圖などは男女年齢の差異等に依つてはいくらか撰擇上に注意せなければなりません、又其の子供の性質とか嗜好とかの方からも考へなければなりません、と思ひます。

此の節はかゝる方面に家庭でも、學校等に於いて漸く注意し始めましたが、未だ至つて少いのであります、凡て一般がこゝゆゑ風に一定した物を撰び用ゆることになりますと、製造元でも自然それ等の事に一定することと思ひます、然し今の所では多くが加ゝる考へがありませんで、只品物の賣

れ口の宜しき様にのみ計りて、教育上の事などには何の考へもないのが多いのであります、此れからは製造元でも商人等も教育上の考へを以て或は製し或は販賣して貰いたいのであります。

英國米國あたりでは手帳雜記帳の如きものに其の國の國旗が書いてあると云う事でありませぬ、此れらは實に有望なことで教育上から見ても、誠に凡ての目的に適い、且つ利益多くして害は少しもないのであります、實に頼母しさもので、余等の尤も賛賞すべき事でありませぬ、どか日本でも一般かゝる感念を以て斯かる者を書いてある者を採用せらるゝ事を皆様に望むと共に、又一般の人等にも其の感念の行き渡る様に御互に盡力すべき事であると申します。

ここに一言附け加へていふべきは、兒童は一般讀

本とか修身書とかは比較的大切に取り扱ひをいたしますが、手帳とか雜記帳とかは讀本や修身書等と比べると餘程粗末に取り扱ひをしますが、これは甚だ困まつた者であります、是れ等も讀本等と同じ取り扱ひをして決して輕重の有るべき筈はないといふ習慣を養成しなければなりません、子供は多く手帳雜記帳の中には色々がきをして、こちらには目鼻の附いた人形、こちらにはでくのぼへへのへのもへーじじなどかきならべておきませぬが、斯かる物を認めたならば何故に書きしか、何故にかゝる者を書いては悪しさを充分わかる様に訓誡して、斷じて止めさせねばなりません、然かせざる時はいつ迄もらく書をしたたり、粗末に取り扱つかつたりする感念がぬけないのであるから、よく注意せなければなりません。

馬鈴薯各種調理新法

平岩 繁治

●落雁 馬鈴薯澱粉一升を炮爐で色のつかぬように煮り、大白砂糖八十匁許を加へ、布巾に包み、湯煎にのせわづかに濕氣を含ませた上、再びよく交合て型に入れ、打堅め陰乾となす。

●煎餅 全上澱粉一升到炭酸曹達五匁と玉子の黄身四個許、白砂糖二百五十匁をよく混和して「とろろ」にし、而して煎餅形に入れて焼きて製す。又澱粉を製した薯粕を乾し挽白でこまかく粉にし之に砂糖少許を交せて水でよくねり厚板の上にかき煎餅の如くにのばして太陽に乾して後焼て子供に與ふれば廢物利用ながらまことに結好な物が出来るなり。

●羊羹 薯一升(皮を取りたるもの)に能く煮た

る白大角豆三升を混じ、再びよく煮て其れを漉し餡となして此れに寒天十本許に水一升を加へ煮て白砂糖四斤と前の餡とを加へ少し煮て充分混じて其の儘箱に移し冷へたる後適宜に切る。

●薯餡 馬鈴薯を摺りて水に入れ、よく攪拌した後粗く漉して糯米少許を鍋に入れ、火に上げ充分沸騰させて後冷し、薯の摺りたる者一貫目に付大麥の「もやし」一合五匁の割合を以て混入て桶に入れ、外の空氣に觸れぬように毛布類をかけて外圍を包み、三四回攪和する時は、ちようど水の様に變化す、此の時袋でよく絞りて其の汁を鍋に入れて火に掛けてをろくと煮詰めると餡となる。其の堅さ柔さは煮加減で如何様にも出来るなり。

一、課題 秋季雜吟一人十句以下

一、べ切 九月二十五日限り

一、披露 十一月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にも投吟すること

を得用紙は端書に限り(可成繪葉書に
記載せらるべし)住所氏名雅號を明記
し都合上必らず左の名宛にて送らるべ
し

埼玉縣入間郡芳野村

フレイベル會俳句掛

鹽野 奇 零宛

第二回俳句端書集

蚊處や草を抜ても水の湧く 東京 久米 辰子

男一人大の字なりや夏座敷 全

雨々とのみわりや五月の旅日記 全

學校を其氣ではげめ蜻蛉釣 全

石切の晝松明や苔清水 全

たわむ穗に寐心のよし落し水 長野 飯塚 曉霞

蓮咲くや野寺に高き經の聲 全

笛吹て行くは誰かや夏の月 全

持ながら眠る子供や螢籠 東京 平岩 學洋

暗燈のくらし貧女の夕蚊やり 全

夏の月秋の心のその影に 埼玉 大野 紫水

松風に夢破られて夏の旅 全

徳に入る門に牡丹の行儀哉 帶津 帶水

川骨や鉢に一と株髮結床 達磨 庵

湧口の草分けて呑む清水哉 新潟 若井 溪水

醜草の風腥き暑さかな 丹波 廣野 奇骨

涼しさや祝捷會の夕ともし 神奈川 杉崎 雲濤

涼しさの跡は冷たし夏の月 鳥取 小島 文耕

炎天や敗將 一騎 蕨地 東京 下村 葉舟

遠征の君思はるゝ暑さ哉 下野 松岡 桂月

晴上る雨の匂ひや釣葱 甲斐 小林 泉南

夏菊や枕一つの別座敷 近江 中村 竹人

夕立や笑ふて戻る水喧嘩 遠江 内田 一秀

玉川の螢わびしき雨夜かな 大井 一笑庵 一笑

不圖起きて雨の音聞く晝寐かな 川越 内藤 清堂

オルガンに晝寐させして村夫子 全

新聞を片手に父も晝寐かな 玉の緒

更ける夜の裏町淋し飛螢 三重 稻垣 路笑

一人づゝ三間に分れて晝寐哉 全

蚊遣火や戸毎に見ゆる穢多の村 秋田 石井 竹村

墓原や草取のけて百合の花 全

日にやける土の匂ひや茄子の花 京都 八木 可笑

◎三光

人、日に月を足して植えずむ田毎かな

平岩 學洋

地、稻妻に一字は見たり寺の額 久米 辰子

天、短夜や泣く子を寐せて手内職 帶津 善亮

◎追加

無一庵 奇 零

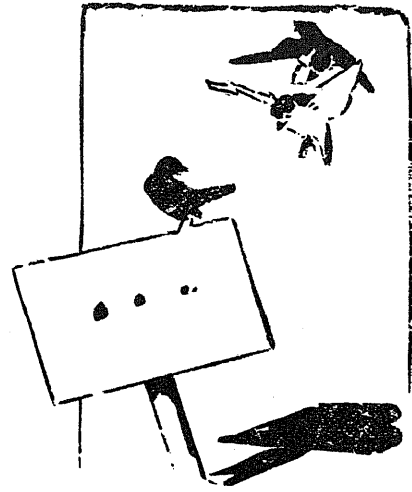
取ちらす詩書百卷や土用干

炎天や赤馬車走る沙けむり

雲行の變る其日や虎が雨

薬日や田ウゴキ草も探し得て





歌 七 首

佐々木信綱

つるしたる草鞋うごきて驛路の

夏なほ寒き夕ぐれの風

森かげもたましくもるゝ光あり

あまりに闇き吾世ならずや

病める身をこゝに養ふ温泉の三年

よしやいゆとも望める世か

秋風に胸やぶられしばせを葉の

猶さりげなく打なびく哉

竹村の夜半のしらつゆ闇にかちて

やみにぞ消ゆる夜半の白露

打つれし村の若衆がさのさ節

遠くさえゆくおぼる月夜や

志むなしく老て友もわれも

やつれたる哉ともし火の前

修善寺に遊びし折

東 くめ子

ゆかりある名にしおへれば水やすむ

月の桂の川のながれは

蔭ふかき樹の間につりしハンモック

ゆられて眠る稚兒の夢はも

國風と布引の瀧

米 溪

知川の所謂「月白く砂白く水亦白き」瀬戸内海に、更に白の白を以て鳴るものは、布曳の瀧にあらざるや。

山甚だ高からざるも、翠の松、色一入濃やかにして、懸崖幾丈、所がらとて、花崗岩の山骨處々に顯はなるが、風刀雨鑿に砂となれるもの、細砂涅まずして溪流自から清暢、夏期一掬の味は、蓋し骨に沁するものあらんとす。此の瀧、今は神戸市水道の根源となりて、貯水池に遮らるゝより、水量亦昔日の如くならず、従て瀧の美たる跌宕雄偉の觀を殺ぐものあらんも、亦清爽閑雅の趣を加ふるなくんばあらず。

雌瀧は神戸より程遠からず。高さ二十余丈、岩

を穿ちて奔放し、飛沫衣袂を濕ぼす。雄瀧は稍登攀して之を得たり。三十餘丈とか。一條の素練曲折三四、高く巖角を壓し、一樹の疎松、斜に水を擁して翠滴らんとし、日斜にして白玉散ずる所、彩虹横に帶して優婉天女の翡翠の扇を翳して舞はんと欲するが如し。之れ其の大觀なり。若し夫れ露霖連日、風、樹梢を鳴して横まに吹くに當りては、濁水漲りて山爲に動き、飛泉激して地亦震はんとす、謂ふに瀧の偉觀は、却て、此の時に在るべきか。在原業平の、昔、遊べりと云ふ砂の山は今、圓山と稱して、一簇の松樹丘を包み、程遠からぬ處に在り。平氏の土脊尾兼康が雷に逢うて震死せしは、此の雄瀧の邊りにや。近年迄は瀧壺の邊りに迄降り立ちて、觀を擅にするを得たるも、今は此の水、亦下流の貯水池に導かるゝより、近

く降ること叶はず、

余我が國風の内に、此の瀧に關せしものを求むるに、其の純白なる所を詠せしもの、跌宕の趣を寫し、もの、懷を濁水の様に寄せしもの、千態萬様なるも、概して、雄渾壯大の情に乏しきは、想の至らざるものありてか、瀧の名に泥みてか、水の姿の優しき爲か。乞ふ左に少しく之を掲げん。

純白の布引

布曳の瀧の白糸うちはへて 後鳥羽院

誰れ山風にかけてはすらん

山姫のみねの梢にひきかけて 輔 親

晒せる布や瀧の白波

後茶入道前内大臣

日にみかき月にぞ晒す白玉の

亂れて落つる布曳の瀧

久方の天つ少女のなつ衣 有 家

くも居に晒す布曳のたき

水の色たゞ白雪と見ゆるかな 顯 房

誰晒したるぬのひきのたき

山人の衣なるらし白妙の 讀人不知

月に晒せる布曳のたき

或は皜々の糸を以て譬へ、或は山人の白衣に比し、或は雪、或は玉、皓々たる素練、高く雲際に掲る。梢の綠翠一層の翠を増し、水の色、白愈々白を磨く、秋天露白く、月亦白さとき、白白相映するの情、想見すべからずとせんや、之れ瀧の名を得る所以にして、聽て之れ等の詞ある所以なり

跌宕の布引

水上はいづこなるらん白雲の 輔 親

うちより落つる布引の瀧

天の河雲のみをより行く水の 頼 氏

あまりて落つる布引の瀧

水上は霧たちこめて見ゆねども 読人不知

音ぞ空なる布引の瀧

天の川これや流れの末ならん 読人不知

空より落つる布引のたき

上、九天を想望して瀧の大を譬へ、銀河を拉し

來つて奔放の勢を示し、琴々鞞々、聲山谷を動か

して、水源霧罩め雲悠悠たる様を寫す、稍々跌宕

の趣を得たりと云ふべし。

雲居より轟き落る瀧の瀨は 皇后宮權太夫經信

たい白糸の絶にぬなりけり

の如きは、純白跌宕併せ得たるか如くなるも、

遂に布曳の名に泥みて、下半力なきは惜むべから

ずとせんや。予謂へらく、瀧の美は雄大に在り、

高壯に在り。而して、瀧の雄大高壯なるものは、

五月雨月を互りて濁水横溢する時に在り。山動き

谷咎へ、奔放仰ぐべからざるが如きは、乃ち以て

瀧の美を見んとす、偉を見んとす、霪雨日長く、

窓前の梅子將に熟せんとして、満目みな陰濕、細

溪尙黄、瀧豈獨り世外のものならんや。

五月雨に水のみな上澄みやらで 行 能

晒すかひなき布引のたき

晒し得ぬ色かとぞ見る五月雨に 中臣祐經

にむりて落つる布引のたき

うちはへて晒す日もなし布引の 守永親王

瀧の白糸五月雨のころ

水の澄みやらさるを嘆じ、布の色濁れると比ぶ

折角豪宕の景を捉へながら、名に泥みて、遂に織

化し去りたるは惜むべしとせんか。併し、豪放も

一風流、清楚も一雅趣のみ、瀧と云へば、直ちに豪放の様を想起するは、自然の數にして、真趣の在る所なるも、瀟洒優雅、自然其の名の由來する所にして、其の姿の表する所、此の瀧の如きは、強ち、罪を作者にのみ歸すべからざらんも、少くも、名に泥みて瀧の真趣を閑却したる迹は、歴々徴すべきにあらずや。題に泥みて瀧の眞を忘れらんは、見ん人の注意なるべきなり。況んや之れ等の國風、彼の

日照香爐生紫烟 遙看瀑布掛長川
飛流直下三千尺 疑是銀河落九天

と曰へるものに比すれば、雄大跌宕、寧ろ之に存して、着想亦遂に此の一絶の外に逸する能はず。其の稍々趣を異にせるものも、纔かに、纖折を競ひて氣魄に乏しきは、大に察すべき所ならずや

國風源流二千年の昔に比して、今に至る迄、遂に甚だしき進歩革新を見る能はざるは、泥つ所在にあらざるか。否か。

金の亞米利加

亞米利加人は全体虫歯の多い人間なので有名で、従つて亞米利加と云ふ國は齒科醫術の發達して居るので有名だが、此國で毎年天國へ昇る人が其遺骸と共に地下に遺して行く入齒金の總額は實に大したもので、其額は無慮百萬圓に達するそうだが、そこで或人の統計によると斯う云ふ風にして三世祖も續いたなら地下に埋れる人齒の金が總計二億八千六百萬圓となり、即ち現時合衆國に流通する總金額に相當するだけの巨額に昇るそうだ。

松川浦に遊ぶ

小林雨峰

予の東奥に遊ぶとて、に三たび、遊ぶごとに何事をかものす、この稿數年前草せしもの今年また此のあたりに至れるも遂に松川浦に遊ばず、されども曾つて見し、浦曲の景色思ひ出されて

神往々堪へず、紀行の一節を抄す。

八月八日、此の頃の涼氣朝夕頓に催し來れるは、流石に初秋の時候を迎へたる爲にや、蛸蟬未だ老ひたるを見るなきに、この涼冷を迎ふ、造化の人間を弄するとの奇なるを啣ち、友とち連れだちて中村町（磐城）を去る一里餘りなる勝地松川浦に遊ぶ、快適の情、未だ行かざるに既に胸宇に溢る蘆堂、痴仙と後になり、前になり下松と云へる處より、一隻の小舟を倩ふてゆく、淺水猶ほ棹すに便ならず、捲藻草艫を纏ふて更らにゆき易らず、漸く進めば雲脚雨を催し來りて、鳴神さえおどろしく遠く響く、遙かに雲間の彼方を仰げば峯巒重なり合ふて、突兀蜿蜒翠巒嶽く飛ぶ、雨雲やとぎれととなりて、東方の灣水廣く漲り來れり、小舟を離れて陸地上れば、細徑の傍には蠣

殻堆く、そこへと積まる。洞門の如き形なせる岩屋あり。何にやあらんと窺ふに、これは鹽焚き竈のそれと知らる、鹽槽立ち並び、中には今鹽焚きかゝりて、煙さえ蓬々として薄らけく舞ひ上るすら見ゆ、

わはれ蟹戸藤丁の生活、藻鹽焚きつゝ、其日くを送りゆく、此處に幾何の恩賚ありと世の人は知るや知らずや、五六軒斗りなる浦曲に臨みて立てる家々の子供等の、吾等の風を見ては目を峙てつ打ち見やる様のいかにも哀れにも覺えつ、徑路の盡くる處に到れば、懸崖を削りて石磴あり、軽く歩を運びて躋るに、上に小やかなる拜殿あり、夕顔觀音と題せり、この觀音昔時瓢に乗りて漂泊したるものなりとか。風雅なる觀音もあるものかな、なぞと獨語しつゝうち拜みぬ、

崖がけの前面ぜんめんには小松懸こまつかけれり、眼下がんげ幾いく十尺じゅうしやく、灣水わんすい深ふかく浸ひたりて深碧しんせき渦ま巻まけるところ、これ海うみに太平洋たいへいようの潮うしほにぞある、崖がけに傍そばふて風雨ふううに曝さらされたる、鼻缺はながけ地藏ぢざうの正体しやうたいも鹽風しんかぜの爲ためめにや落凹おちぼみて、臙ろおぼろに化地藏ばぢざうとなり果はてける様さまの如何いかにもわはれなる、石佛いしまとけのミールと云いは、大方おほかたは推おししられん、岩蟹いはかにのちよこくと匍はひ出いづるを、輿きゆうがりてさては堂後だうごに攀よち上のぼりぬ、三人巖角さんいんがくに踞まして腰こしを熨のし、遙はるかに東北とうほくの方かたを見渡みわたせば、遠とほきは水天一すいてん髮横はつよこに際涯さいがいなし、南みなみに廻まはりては松川浦まつがわうらの全景ぜんけいは煙嶼えんしよく點々てんてんとして眼底がんていに集あつま、此この浦うらの十六勝じゅうろくしやうとして掌中しやうちゆうにあらざるなし、謂いふに、此この浦うらを圍かこめる處ところは東岸とうがんを除のぞきては三面めんの列障宛れつしやうざなからこの灣わんを掩おほへる籬まがきの如ごとく、灣内わんないの島嶼とうしよくは浮島うきしまのそれの如ごとし、文字もじケ島しま沖おきケ島しまなぞ小橋こはしを細ほそく渡わたして、往ゆき來きすべく設たごけ

られたる、島のわなたこなた苦背くはいの屋根やうの上うへより薄うすき煙けむりの立ちのぼる、鹽田しほだの格子形かうしがたに造つくられたる其そのの繪模えも様よう、たゞ夫それ東岸とうがんの汀洲ていしゆ一條いちじやう、松沼まつぬまケ濱はまより一步いっぽ轉てんすれば洪濤こうたう怒浪どらうと共に海底かいていに沈しづむべし飛鳥あまがみ湊みなとは汀洲ていしゆの盡つくるところにして、海水かみずまた深ふかく浸ひたせり、此この湊みなとに連つらりて今いまわが立たてる處ところを水莖すゐけい山さんと稱しょうして、其一角そのかくを鷓尾崎せびさきとは云いふなり、其風そのかぜ光ひかりげに言いはんかたなし其そのの南方みなんぽう遠とほく濛々もうくく乎ことして辨せんすべからざる處ところに原はらの町海岸まちがいはんを指點ししてんすべく、浦うらを隔へだて、南みなみより西にしに奔わしりては實じつに是これれ阿武隈あぶくま一帯いちたいの山脈さんみやく環わん而連亘えんれんし、或あるひは近ちかく、或あるひは遠とほく、或あるひは淡たん煙えんの如ごとく、或あるひは青螺せいらの如ごとし、顧かへりみて北方海面ほくぱうかいめん脚下かたの斷崖だんがいを俯視ふしす、潮音雷うしあらいの如ごとく、巨巖きよがんに碎くだけ、躍おどりて玉霰たませんを散さんずるが如ごとく、寄よせては返かへす波打際なみちぎは遠とほくは澎湖まうはいの奇觀きくわんを呈ていして、瞬時しんじにしてわれは其その

の雄大、崇高の奇觀に驚眩せられ了りぬ、其の崖に伏し生ふる女松男松、翠蓋幾條、百丈の巖角を縫ふて垂るゝもの、或は巖隙を貫きてあはや其根幹水に落ちんとして落ちざるもの、其の間に凸凹せる亂石奇巖殆んど名狀すべからざるものあり、かゝる危き崖際に沿ふて咲き亂れたる草花の名も知れぬが多かるなかに、優にやさしくも咲き出でたるは一朶の鹿の子百合のそれなりき、かすかに猿臂を延ばして、摘み取りしに、花語はいともみづ／＼しく、白きは愈々白く、香ひは愈々高し

嗚呼この一輪の百合の花よ、われは其の可愛き姿に心動きぬ、野草幾種、林木幾類、自然の賜は澤なす斗りなるに、何とてこの百合の花のみ、この崖際に咲けるなるかと鋭き感じは與へられぬそは何故ぞやわれはこれを女性の一面に考へ及ぼし

ぬ、かの女性の世の辛苦と艱難の柵に纏はれつゝつれなき生涯を経て、寄る邊なき身となり果つるも、一片の情操をいさゝかの追憶の躰に委せて、辛き世ながらに、堅き真心の力をたよりつ、一生を優にやさしき間に送る、この花それにも似たらすや、白き花冠をこの海甸に巖頭に翳して、颯風幾夜吹き荒む中に凜たる佳香を放つ、烈女貞婦のそれにも似ずやなぞと、心竊かに思ひ出されしが既に去りし二友に呼ばれて、ひた走りに走りて、もと來し夕顔觀音の石段を降り、小店に寄りて、林檎購ひ求め帽子を臨時のバスケットとはしつらひつ舟に歸り、舟越觀音より、裏濱傳ひに進みゆけば、はや原釜の浦邊にと出でぬ、暮色海灣を包みて、山容また消ゆるに似たり、只響く潮聲の去來、脚下に其の呻りを高ふするあるのみ。

大阪みやげ

滞在僅に一週間、其交際の範圍もまことに限られて居る、従つて、其土産といふものも、まことに金のかゝらない、ケチな御品物と御承知を乞はねばならぬ。

夏の大坂 東京の夏を知る者には、容易に大阪の夏の如何が推知せられよう。櫛の齒の如くに並んだ瓦屋根から照り返す夏の日の熱さ、空を衝いて屹立せる幾多の烟突から吹きでる煤烟、肩摩殺撃たる心齋橋筋、千日前の人波、以て空気を洗ふべく以て人目の疲勞を助くるに足るべき緑樹の缺乏せること、凡そ之等の要素は、此頃の大阪を想像するに足るべき好個の材料である。但しかく一概にいつて仕舞へば夏の大阪たるもの如何にも殺風景極まるものであるが、然も、所變れば品變る、

他の都會に在つて容易に見るべからざる夏の情景は、所謂

納涼船 である、納涼船は夏に於ける大阪人士唯一の娛樂と見える、人若し試に行いて、淀川の畔天神橋、難波橋の際に立たんか、片舟に行燈として、三人五人の男女乗り合ひたるもの陸續として河下より遡りては此處に集まり、遂には川の一面に行燈の火で覆はれるのを見るであらう。これは確に東京邊りでは、さう簡單に得られぬ夏の夕の遊である。之に因みていふは

納涼臺 である、中の島の東の端に當つて、大凡そ六七十間の長さの臺を造つて、川中に突き出して居る、此處に遊べば、新聞縦覧所あり、茶會所あり、射的場あり、落語あり、而して氷店、而してピーヤホール、入場料三錢を拂つて、蒸される

様な夏の半夜を此處に過ぐす人、この界限に頗る多い。納涼臺には、か様な譯で、何夜何千とも知れぬ人が集つて居る故一寸見ると、如何にも涼しくはなさそうだが、川中丈けに多少の涼を貪るところが出来るが、涼しそうで、其實涼しからざるは彼の納涼船だとは一般の人の言ふ所、我が經驗も確にそれを證據立てたのであつた。

●●●●●
 中の島公園　これが、大阪市唯一の公園とは、情ない話であるとは、此地の人士も夙に口にする處である。こゝに壯大な圖書館がある、住友家から市に寄附したものである、公會堂がある、博覽會の節協賛會の建設したものを其儘市に寄附したので、悠に三千人を容れることが出来る。教育のためとか、慈善の爲ならば市では無料で貸す。大阪ホテルがある、當地第一のホテルで東京の帝國

ホテルと匹敵すべきもの、併し、其處の洋食料理は、夫程には行かないのだと或人の話であつた。豊國神社がある、規模は稍見るに足るといへ様、所謂、中の島公園といふものも、若し、之等の建物までも、悉皆取り入れてあるとすればまだしもだが、猫額大の所に、僅な矮樹と青草とでは、丸で、人間のあえものを見る様な調子で、とても公園として此界限數十萬の人を樂しましむることは出来ない。次に、ずつと西に飛び離れるが、築港のことである、これは近年大阪市の經營にかゝる最も見るべきものゝ一つで、其規模計畫、いかにも壯大なもので、北突堤は安治川を内に含圍て、海中に突き出すこと一千五百九十二間、南突堤は木津川より起つて、延長一千八百五十五間而して、新埋立地の中央から、港内に突き出せる

棧橋は長さ二百五十間、幅十五間、若し此工事の完成出来た曉は、市の壯觀、はた幾倍の光を増すであらう。

此築港は、今の處では一の納涼場となつて居るのである、而して、茲に至るには凡そ一里許り、新開の大道路一直線に通ずる所に電車を運轉して居る、東京市のよりは、速力も早くつて、夫に、二階附の電車などがあるのは一歩進んで居るといはねばならぬ、夕景からかけてそこに行く、さすがに遠く隔たつてゐるから、彼の納涼臺から見ると雑沓が少くつて、且つ何しろ、海中だから遙に涼し、橋の兩側には、蹲居して太公望を氣取るもの、三々又五々、其尖端には、ピーヤホールあり以て簡単に夕食を認むるを得べしである、夕食の序に豫ねて、世の諺にまでなつて居る、京の衣倒

れ、界の建て倒れ、

大阪の食ひ倒れに付きて、所の人士の説を聞いた、大阪の食ひ倒れ、一寸聞くと、東京邊りて言ふ食ひ道樂と同意義に聞かゆる、料理のハイカラを尊ぶといふ風に取りれる、が、事實は全く違ふ、食物の味を吟味して、どこまでもハイカラ的に料理に金をかけるといふよりも、寧ろ、不味くつても量の餘計なるを尊ぶといふ意義である、故に、ピーヤホールに入つても、必らずしもカツフキーを望めない、況んやケーキをや、更に況んやスーブをや其代り、以て腹を肥すべき料理は敢て心配するには及ばない。

ピーヤホールの咄の序に、尙一つ他郷人の目に付くものを紹介しよう、他でもない、之等のピーヤホールとか氷屋とかに於ける

給仕女の服装 である、蓋し蝦茶式部といふ語を以て、當今の女學生の一名とすることは、少くとも、此大阪に於ては通用しないのである、如何となれば、當地に於ける之等の給仕女は悉く蝦茶袴を着用して居るからである、先年の博覽會の遺物と稱するものが甚だ多いのであるが、給仕女の蝦茶袴も亦其一たることは、識者の夙に了知せられる所だと信ずる。

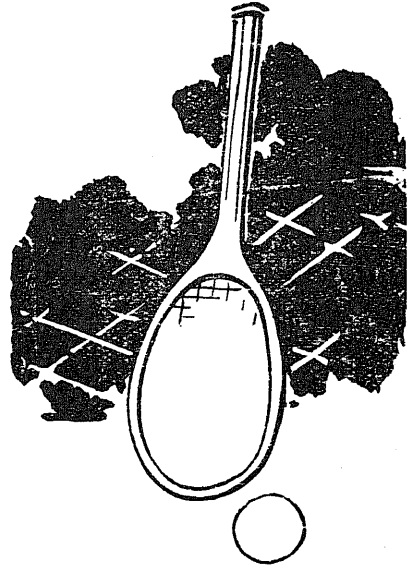
人力車 賃錢の廉なのと足の疾いのは、夙に大阪人力の特徴であつたのだが、今日に於ては、少くとも、其一特徴は失つた、詳にいふと、賃錢はこゝ十年前から見ると、大方五六倍の騰貴だ、而して、昨年の博覽會以後は更に著るしく上つたといふこと、但しさすがに、車夫の足の疾いのは心地がよい、此點につきては、概して言ふと東京の

車夫は比較にならない。

大阪人の美點 勿論一二では足りまい、しかし、其中の一として記憶に留つたのは、一般に祝日大祭日を尊重することで、此日には、大抵お休みにする、一體、大阪人は、遊ぶことも遊ぶが、其代り働くことも随分働く、つまりよく勉めよく遊ぶ方だといふ話し、時局に際しても、勿論多少の影響は受けて居るに違ないが、大した困窮者も出ないといふのは、一は之が爲でもあろう、(未完)

宮城縣保母養成所

同縣師範學校内に開きたる同所第一回卒業生の實地保母は、其兒童二百名に及び非常の好成績にて先月二十二日終了せりといふ。



摩天嶺の花

戦地より通信の片端に、このやさしげなる文字
ありしまゝに、録しつ

摩天嶺の花 は例により美事に候、特に目立は、
女郎花と桔梗の多く且つ麗はしやかに打交り咲け
る事にて、此自然の、此山に十數日前、彈雨降り
硝煙覆ひたる事を毫も知らざるものゝ如くに候、

勇士の忠魂は此好景と此美花とを眺めて、無窮に
安静に永く満洲の鎮たる可く候嗚呼！

ダルニーの物價

左に記すダルニーの物價表は七月十日民政廳より
揭示せしものなりとて同地よりの通信に見えたり

鶏一羽	大 七十錢	小 五十錢	鶏卵	十個 二十八錢	百個 二圓五十錢
豚肉	一斤 二十八錢	白菜	一斤 四錢五厘	紅大根	一束 六錢以内
葱	一斤 四錢五厘	赤砂糖	一斤 十五錢	水大根	一束 五錢
燒酒	一瓶 廿五錢以上	マツチ	一包 大 五錢	洋蠟	一包 六本 八廿錢
ラムネ	一本 大 十錢	鹽	十斤 二十錢	油	一箱 二圓廿錢以上
石	二圓 三十錢以内	旭ビール	一本 三十五錢	薪	百斤 一圓八十錢以上
	二圓以内				

軍人の幼児救護

軍人遺族救護義會にては應召軍人の幼児教養方を各地孤兒院へ依託せんと企畫し夫々照會したるに就も快諾せるを以て愈左記の各項に據り救護する

ととしたれば出征者家族より速に申出でるやう示達方を各府縣知事及市長へ依頼せりと云ふ

軍人幼児救護内規

- 第一 本會に於て軍人の幼児を救護するには左の諸項に該當するものなるを要す
 - 一、孤兒院に於て身體其他の關係に就き拒絕せざるものに限る
 - 一、養育者召集を受け其家赤貧にして教養の資力及養育すべき家族なく若くは之れに代りて教養をなすべき尊族親なきもの
 - 二、前項尊族親あるも赤貧教養の資力なきもの
 - 三、年齢滿十三才以下なるもの
 - 第二 本會に於て救護する軍人の幼児は其教養を孤兒院に委託するものとす
 - 第三 應召軍人歸宅若くは他の親族より代りて養育をなすを申出たるときは本會は同時に救護の任務を解くものとす
- 但應召軍人歸宅すと雖傷痍を受け若くは疾病に罹り子女の養育を爲すと能はざるものは此限りにあらず

第四 本會負擔の養育費は幼兒滿十三年に至りたるときは之れを停止し爾後の養育は一切孤兒院に委託するものとす

第五 此内規に於て救護する幼兒は市町村費に於て救助を受けるものに非るを要す

第六 幼兒、後、孤兒となり國庫及町村の救助を受けるに至りたるときは本會は同時に其救護を解くものとす

紫色鉛筆使用禁止の訓令

有色鉛筆の毒分含有に就ては未だ學說一致せざるも、事實上、人体に危害を及ぼすは何人も異論なきより、文部大臣は先般學校生徒の紫色鉛筆使用禁止に關し左の訓令を發したり。

學生々徒等の使用する「コピールピオレット」リ
 ラピオレット」「ヨハンコピール」「ハツエ、クルツ
 コピール」等の記號ある紫色鉛筆は其製造の原料
 に有害の色素を包含するが故に、其の破片又は溶
 液の眼中に入るときは激烈なる毒作用を呈し、遂

に不治の眼疾に陥ることあり、仍て幼稚園及び小学校等の児童には之が使用を禁止し、其他の學校の學生々徒にありては必要缺く可からざる場合に限り之を使用せしむることを得ると雖も、其使用上に周密の注意をなさしむべし。

會 報

入 會

大分縣速見郡藤原村	伊東國子
京都府舞鶴町廣小路	阪根かす
牛込區天神町五十三番地	右事務所申込
岡山縣岡山市西田町十九番地	大塚珠子
赤坂區青山南町一丁目三十二番地	右紹介岸邊福雄
	右紹介田邊春子
	兒玉糸子
	右紹介松村久
北海道函館區沙見町廿一番地へ	武藤むめ
鳥取縣鳥取市東町官舎へ	桑原いはほ

轉 居

姓 名	自年月	至年月	金額
伊東かめ	三六、一一	三八、一一	一〇〇
渡邊みめ	三七、七	三八、一	七〇
寺島とう	三七、九	三八、六	一〇〇
上總亨	三七、二	三七、一一	一〇〇
中松久	三七、八	三八、五	一〇〇
谷木久	三七、五	三七、一〇	六〇
鈴木たけ	三七、四	三七、六	三〇
中島行徳	三七、四	三七、六	三〇
高橋しほ	三七、四	三七、六	三〇
江藤みほ	三七、四	三七、六	三〇
三島つる	三六、一一	三七、六	八〇
水口みつ	三七、四	三七、六	三〇
佐藤うめ	三七、四	三七、六	三〇
竹澤さと	三七、四	三七、六	三〇
岡田千代	三七、四	三七、六	三〇
須藤とね	三七、四	三七、六	三〇
須藤しげ	三七、四	三七、六	三〇
星居ひさ	三七、三	三七、六	四〇
岩田よさ	三七、三	三七、六	四〇
武田まね	三五、八	三七、六	二〇
川島庄一	三七、四	三七、六	三〇
澤田ぬ	三七、四	三七、六	三〇
古田利徳	三七、四	三七、六	三〇
古田静	三七、四	三七、六	三〇
タツヒン	三六、一〇	三七、六	九〇
金子きた	三七、四	三七、六	三〇

明治三十四年二月廿八日第三種郵便物許可



唱歌教科書

郵税一册に就き金四錢

空前の唱歌良教科書！
檢定濟生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定濟

教師用	生徒用
全四册	全四册
第一卷定價金三十錢	第一卷定價金十五錢
第二卷定價金三十錢	第二卷定價金十五錢
第三卷定價金三十錢	第三卷定價金十五錢
第四卷定價金三十錢	第四卷定價金十五錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書となす。博し非常なる大喝采を博し、僅々數月間に三版發行の盛運に會し、たる本書は今回其生徒用教師用共に文部省の檢定を経て、更に其眞價を發揮する。從來文部省檢定濟の榮を得たり。即ち許師の参考と用し、みしにせしむるのみにし、生徒用とし、眞の教科書たることを檢定に經つたことを以て、本書か如何なるに足るべし。かを

洋琴 金參百圓以上 各種

ヴァイオリン 各種

鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種
舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バットン、テナリ、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上
○學校用一組拾參圓

手風琴

金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種
保險 附 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨ、レツト其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

ピアノ、調律修繕

郵券貳錢 御送附目錄進呈